

資料

日本における SD 法による研究分野と その形容詞対尺度構成の概観

井 上 正 明* 小 林 利 宣**

THE RESEARCH DOMAIN AND SCALE CONSTRUCTION OF ADJECTIVE-PAIRS IN A SEMANTIC DIFFERENTIAL METHOD IN JAPAN

Masaaki INOUE AND Toshinobu KOBAYASHI

This paper presents a survey of the research domain and scale construction of adjective-pairs in a Semantic Differential Method in Japan. 233 papers or articles using Semantic Differential to measure the meanings or images of the concepts were collected. Among the collected articles 99 papers using factor analysis on scales were examined. From the point of factor analysis on the adjective-scales 382 pairs were collected. Also 68 effective scales having high frequencies in the Semantic Differential study were examined. On the bases of these results, 68 proper scales fitting to measure the meanings or images of self-concepts, ideas of children, and personality cognition were hypothetically constructed.

Key words: adjective-pairs, Semantic Differential Method, image, concepts, factor analysis.

1. 問題の所在

意味微分法 (Semantic Differential 法) は, Osgood (1952) が最初に理論構成をおこない, その後, 共同研究者である Suci および Tannenbaum とともに『The Measurement of Meaning』(1957)を著わし, その中で大規模におこなわれた研究に使用された方法である。もともと言語の意味の測定法として開発された SD 法は, その後言語の意味の測定のみでなく, ひとが色彩, 図形, 音楽, 絵画, 商品, 人物など広い範囲にわたる事象に対して抱く意味あるいはそのイメージを測定する方法として利用されるようになった。今日では, さらに態度

変容, 治療過程における人格変容, 文学教材の登場人物, 教育機器などに対するイメージの測定にも利用されている。

今日までおこなわれてきた SD 法による言語の意味の因子分析の結果, それを構成している意味次元は, だいたい evaluation, potency, activity の3因子で構成されていることが明らかにされている。しかしながら, これらの3因子は, 言葉の意味を測定する研究で明らかにされたものであり, 他の心理学の分野でも, これらの3因子が明確に抽出されているわけではない。

ところで, 最近の SD 法を利用した研究では, 言葉以外のもの (人物・写真等) を刺激概念としてそのイメージ測定がなされているが, それを評価する尺度には, 言葉の研究で明らかにされた尺度を用いているものが多い。確かに, この3因子は, どんなものを概念にしても普遍的に抽出されるという考えもあるが, わが国の今までの

* 福岡教育大学 (Department of Psychology, Fukuoka University of Education.)

** 広島大学教育学部 (Department of Psychology, Hiroshima University.)

TABLE 1 わが国のSD法を使用した心理学の研究文献 (1958~1984)

領域	刺激	概念	文献数
【社 会】	パーソナリティ認知 19(10)	印象形成 10(6)	対人認知 8(3)
	対人関係 2(1)	礼儀 1(1)	社会的態度 1(0)
	政治家のイメージ 1(0)	同調のイメージ 1(0)	恩 1(0)
【教 育】	子ども観 8(6)	授業評価 7(2)	教師評価 6(2)
	読解過程 5(1)	学級の雰囲気 2(1)	親への態度 2(1)
	外国語のイメージ 2(0)	学校観 2(0)	教室の風土 1(1)
	人物のイメージ 1(0)		
【人 格】	ロールジャッパ図版 9(3)	自己概念 12(6)	自己イメージ 8(5)
	性格概念 4(2)	性格用語 2(0)	不安の程度 2(0)
【芸 術】	音楽 11(4)	舞踊 7(4)	絵画 6(5)
【言 語】	日本語 14(6)	形容詞 2(2)	感情語 1(0)
	一字音節 1(0)	擬態語 1(0)	擬声語 1(0)
【知 覚】	色彩 10(5)	図形 4(2)	衣服 2(0)
	装材 1(0)	砂 1(0)	部屋の照明 1(0)
【環 境】	都市のイメージ 3(2)	テレビの番組 3(0)	ラジオの番組 2(1)
	環境汚染 1(0)		季節 1(1)
【生 理】	音 4(0)	有香物質 2(2)	
【その他】	E・Gの効果 3(2)	生活感情 3(1)	カウンセリング効果 2(0)
	ツメエリ学生服 1(1)	職業観 1(1)	ボディ・イメージ 1(1)
	食物のイメージ 1(0)	職業安定所 1(0)	心身障害者 1(0)
			233(99)

()内の数は、筆者が因子負荷量を整理した文献数

研究ではまだはっきりしたことは言えない。それで、言葉以外のものを概念としてそれを測定する場合には、まず、その刺激を提示して連想語を抽出し、その結果に基づいて反対語の選定およびその尺度の構成をすることが望ましい。

さらにまた、刺激概念が何であるかにはあまり注意を払わずに、今までの先行研究を参考にして任意に形容詞対を選び、尺度を構成している研究も比較的多い。このような場合、その概念に対応した形容詞対が選ばれてはいるものの、それを測定するのに適切であるかどうかは保証されてはいない。この場合には、既に因子分析等が施されている研究の中から形容詞対を選び、それに基づいて尺度を構成することが有効、かつ妥当であろう。

このように、測定概念に対応した形容詞対を構成することは大切なことであるが、これがかなり大変な作業である。そこで、今までわが国のSD法を使用した研究で、それがどのような心理学の分野で利用され、そこではどのような形容詞対の尺度が用いられているか、を調べることにした。さらに、これら個々の尺度(形容詞対)の使用頻度を調べ、それぞれの分野の概念ごとに各研究者が求めた因子負荷量を整理し、どの形容詞対が測定尺度として有効か、を検討することにした。

2. 文献整理の手順

(1) 文献の収集 今回の整理では、SD法についての理論的な文献は一応省き、これを利用していろいろな<概念>を測定している研究をとりあげ、整理した。参考にした文献は、『心理学研究』、『教育心理学研究』、『実

験社会心理学研究』、『心理学評論』、『日本教育工学雑誌』、『計量国語学』などのわが国の代表的な雑誌とともに、各大学の紀要なども調べた。さらに、わが国の欧文の文献や日心・日教心の発表論文集も参考にした。そして、1958年から1984年までに載せられていた研究(233件)をピックアップした。研究の分野とそこで用いられた刺激概念が、TABLE 1に示されている。

SD法を利用した研究には色々なレベルがある。まず最も重要な研究は、①連想語の抽出より始められ、反対語の選定、その結果に基づいて形容詞対が構成され、概念が測定されていたものである。この場合には、大半が因子分析的方法によって尺度の体系化(尺度構成)がおこなわれていた。次に、②既に因子分析的検討が施されている尺度をそのまま利用してある概念を測定した研究がある。この場合、その結果を再び因子分析したものもあるが、ほとんどは再分析をおこなっていない。また、③先行研究の中から、研究目的に合った形容詞対を集め、これらに研究者の方で仮説的に尺度を付け加えて、それを構成した研究もあった。

(2) 形容詞対の整理 個々の尺度(形容詞対)がどのような頻度で使用され、それらがどのような特定の分野で用いられているか、また、いずれの尺度がその特定の研究に有効であるのか、等を検討した。

まず最初に、233件の文献の中から、連想語の抽出より出発した研究でしかも因子分析が施され、因子負荷量の判明している基礎文献を整理した。これらに、先行研究から尺度を拝借してはいるが、改めて因子分析したものを付け加えた。その結果、99件の文献が残った。その

TABLE 2 使用頻度の高い形容詞対の使用頻度

形容詞対	【人格】	【社会】	【教育】	【芸術】	【言語】	【知覚】	【環境】	【生理】	【その他】	合計
(1)明るい—暗い	14	9	11	10	6	5	4	2	2	63(4.64)
(2)やわらかい—かたい	9	5	7	8	5	6	2	2	4	48(3.53)
(3)暖かい—冷たい	9	8	6	6	1	5	3	2	4	44(3.23)
(4)積極的な—消極的な	7	15	11	2	3	1	1	0	3	43(3.16)
(5)強い—弱い	12	6	6	4	5	5	1	2	2	43(3.16)
(6)静かな—うるさい	7	7	8	6	3	4	2	0	1	38(2.79)
(7)陽気な—陰気な	7	5	8	9	3	3	2	0	1	38(2.79)
(8)美しい—醜い	5	5	2	11	5	3	2	0	2	35(2.57)
(9)重い—軽い	7	0	4	6	5	4	3	2	3	34(2.50)
(10)活発な—不活発な	9	6	5	3	3	0	2	0	4	32(2.35)
(11)好きな—嫌いな	4	5	5	5	5	3	3	0	2	32(2.35)
(12)良い—悪い	7	3	3	5	7	4	1	0	2	32(2.35)
(13)親切な—不親切な	6	12	9	0	1	0	1	0	1	30(2.28)
(14)はげしい—おだやかな	6	2	5	6	4	2	1	2	1	29(2.13)
(15)楽しい—苦しい	9	3	5	7	4	0	0	0	1	29(2.13)
(16)派手な—地味な	6	3	2	7	0	8	1	0	1	28(2.06)
(17)面白い—つまらない	6	2	6	8	0	3	0	0	1	26(1.91)
(18)鋭い—鈍い	4	1	2	1	5	5	1	2	0	21(1.54)
(19)気持ちのよい—気持ちのわるい	7	1	1	3	5	0	1	2	1	21(1.54)
(20)頼もしい—頼りない	7	5	7	0	0	0	1	0	1	21(1.54)
(21)たくましい—弱々しい	6	1	4	8	0	0	0	0	2	21(1.54)
(22)大きい—小さい	5	2	2	4	5	1	1	0	1	21(1.54)
(23)まじめな—ふまじめな	5	8	4	0	0	0	0	0	3	20(1.47)
(24)速い—遅い	6	1	4	3	5	1	0	0	0	20(1.47)
(25)愉快的な—不愉快的な	4	2	5	2	3	1	2	0	0	19(1.40)
(26)安定した—不安定な	3	3	3	4	0	3	1	0	1	18(1.32)
(27)おしゃべりな—無口な	6	8	4	0	0	0	0	0	0	18(1.32)
(28)きれいな—きたない	3	0	3	0	6	1	1	2	2	18(1.32)
(29)きちんとした—だらしない	4	6	4	1	0	0	1	0	1	17(1.25)
(30)男性的な—女性的な	5	0	2	4	2	2	1	0	1	17(1.25)
(31)複雑な—単純な	2	3	3	3	3	1	2	0	0	17(1.25)
(32)動的な—静的な	1	1	1	7	0	4	2	0	1	17(1.25)
(33)素直な—強情な	7	4	4	1	0	0	0	0	0	16(1.17)
(34)責任感のある—無責任な	2	9	5	0	0	0	0	0	0	16(1.17)
(35)嬉しい—悲しい	5	1	3	1	3	1	2	0	0	16(1.17)
(36)深い—浅い	3	1	2	1	6	2	0	0	1	16(1.17)
(37)落ち着いた—落ち着きのない	4	4	5	0	0	0	1	0	1	15(1.10)
(38)慎重な—軽率な	3	10	2	0	0	0	0	0	0	15(1.10)
(39)理性的な—感情的な	3	4	3	3	0	1	0	0	0	14(1.03)
(40)やさしい—こわい	3	1	6	0	2	0	1	0	1	14(1.03)
(41)意欲的な—無気力な	2	8	2	0	0	0	0	0	2	14(1.03)
(42)かわいらしい—にくらしい	2	8	3	1	0	0	0	0	0	14(1.03)
(43)のんびりした—こせこせした	2	2	6	3	0	0	1	0	0	14(1.03)
(44)勇敢な—臆病な	5	5	3	0	0	0	0	0	1	14(1.03)
(45)優しい—厳しい	4	5	1	3	0	0	0	0	1	14(1.03)
(46)丸い—四角い	3	2	1	1	4	2	0	0	0	13(0.95)
(47)広い—狭い	2	1	3	0	5	0	2	0	0	13(0.95)
(48)はっきりした—ぼんやりした	0	0	3	2	3	2	1	2	0	13(0.95)
(49)強気な—弱気な	5	3	4	0	0	0	0	0	0	12(0.88)
(50)思いやりのある—わがままな	3	6	2	0	0	0	0	0	1	12(0.88)
(51)外向的な—内向的な	2	5	4	1	0	0	0	0	0	12(0.88)
(52)清潔な—不潔な	4	3	3	2	0	0	0	0	0	12(0.88)
(53)社交的な—非社交的な	3	9	0	0	0	0	0	0	0	12(0.88)
(54)新しい—古い	0	0	2	1	2	3	2	0	2	12(0.88)
(55)まとまった—バラバラな	0	1	2	4	0	3	1	0	1	12(0.88)
(56)元気な—疲れた	4	4	2	0	0	0	1	0	0	11(0.81)
(57)幸福な—不幸な	6	2	2	1	0	0	0	0	0	11(0.81)
(58)感じのよい—感じのわるい	0	8	1	0	0	1	0	0	1	11(0.81)
(59)親しみやすい—親しみにくい	0	6	1	2	0	1	0	0	1	11(0.81)
(60)あつい—つめたい	3	0	1	1	5	0	1	0	0	11(0.81)
(61)優れている—劣っている	3	0	1	3	2	0	2	0	0	11(0.81)
(62)敏感な—鈍感な	3	3	2	0	0	0	0	0	2	10(0.73)
(63)すばやい—のろい	2	0	3	0	3	0	1	0	1	10(0.73)
(64)豊かな—貧しい	1	4	1	3	0	0	0	0	1	10(0.73)
(65)生き生きした—生気のない	0	0	4	3	0	0	1	2	0	10(0.73)
(66)自由な—不自由な	0	3	2	2	1	0	1	0	1	10(0.73)
(67)充実した—空虚な	0	1	0	3	0	3	0	2	1	10(0.73)
(68)にぎやかな—さびしい	0	1	1	2	3	0	3	0	0	10(0.73)
総合計	287	262	242	187	133	94	64	24	68	1361(100.)
(%)	(21.09)	(19.25)	(17.78)	(13.74)	(9.77)	(6.91)	(4.70)	(1.76)	(5.00)	

注) 合計欄、総合計欄のカッコは、68尺度の使用頻度合計1361を100とした百分比である。

のち、各研究者ごとに因子分析をした結果求められた形容詞対と、抽出された因子に対応する因子負荷量を調べた。ここでは、すべての形容詞対の結果を載せたのではなく、因子分析の結果、負荷量が0.3以上あり、しかも因子名が明確に示されていたものを挙げた。

この整理により、①広範囲に普遍的に使用されている尺度、②ある特定の分野に頻繁に用いられる尺度、③あまり用いられない特殊的尺度が見出された。そして、心理学の分野ごとに各尺度の使用頻度を求めた結果、最終的に382組の形容詞対が収集された。その中で、使用頻度の高い形容詞対(68組)の使用頻度を示したのが、TABLE 2である。

3. 形容詞対の使用頻度とその因子負荷量

TABLE 2より、“明るい—暗い”、“やわらかい—かたい”、“暖かい—冷たい”、“強い—弱い”、“はげしい—おだやかな”などのように、すべての分野で用いられている尺度があった。このうち、“明るい—暗い”は、6割近くの文献で使用されていた。それで、ここに挙げる5つの形容詞対はいかなる分野で研究する場合にも利用してよいであろう。ところが、“親切的な—不親切的な”、“頼もしい—頼りない”、“まじめな—ふまじめな”、“責任感のある—無責任な”などのように、その使用がある特定の分野に偏っている尺度がある。これらの形容詞対は、たとえば、人格の様態等を測定しようとする際には有効であろう。

言葉の意味の分析に基づく因子名に基づけば、TABLE 2に載せられている尺度は、evaluation 因子を示すものがかなり多い(たとえば、“明るい—暗い”等)。そして、あとの残りがpotency 因子(“強い—弱い”等)とactivity 因子(“積極的な—消極的な”等)である。ところで、一般的には、個々の形容詞対が示す因子名は、それが研究の中で使用され、かつそれらに因子分析が施されてはじめて命名がなされるものである。それで、ある1組の尺度群の中での個々の形容詞対はそれぞれが同等の寄与率をもっている。ここに示された尺度を利用する場合には、個々の形容詞対それぞれが同等の寄与をもつものと考え、その原理に基づき尺度の構成をし、それに因子分析を施すことが望ましい。

各研究者の求めた因子負荷量の整理では、たとえば、社会心理学の分野における概念の<パーソナリティ認知>では、因子分析を施していた文献数は10件であったが、“明るい—暗い”は、そのうち、4件の文献で因子負荷量が求められていた。また、“やわらかい—かたい”では、そのうち、2件の文献で負荷量が求められていた。

また、教育心理学の分野の<子ども観>では、因子分析を施していた文献数は6件であったが、そのうち、“明るい—暗い”はすべての文献で、“やわらかい—かたい”は4つの文献で、負荷量が求められていた。このような整理により、“明るい—暗い”は、63の文献数で、“やわらかい—かたい”は、48の文献数で負荷量が示されていたことになる。このような整理を68組すべての形容詞対についておこなった。

整理の際、文献によっては因子負荷量が小数点以下第2位までしか算出されていなかった場合には、第3位を0にし、すべてが小数点以下3桁で示した。また、1つの研究で異なった集団に因子分析を施して因子負荷量を算出していた場合には、それぞれのサンプルで求められた負荷量を記載した。

ここで、心理学の各々の研究分野のすべての概念についての因子負荷量を載せることができないので、その結果から主な特徴をみとめることにする。測定されるいろいろな概念の中で主要な概念についての因子負荷量の範囲を示したのが、TABLE 3である。ここに挙げた概念は、因子分析が施された文献がそれぞれ5件以上あったものを挙げている。形容詞対の配列の順序は、使用頻度の高いものからあげ、形容詞対は両極可逆性であるので、負荷量の値は、すべてプラスで示している。

このような整理からまず第1に、刺激概念は、①<自己概念>、<子ども観>、<パーソナリティ認知>、②<絵画>、<言語>、<色彩>、そして、③<自己イメージ>、<印象形成>、の3つの群に分けられる。①の群では、3つの概念ともほとんどの尺度で因子負荷量が求められている。したがって、ここに載せている形容詞対のほとんどは、ひとの人格イメージを測定する尺度として有効であることを示している。

②の群の3つの概念は、ひと以外の具体的な製作物あるいは日常的に使用している事象である。ところが、これらのイメージを測定する尺度は、この68組の中でもかなり使用頻度の高い形容詞対に限られている。また、③の群の<印象形成>は、他者の人格のイメージを測定するものであるにもかかわらず、それを測定する有効尺度は限られる。

各形容詞対の因子負荷量をみると、1つあるいは2つしか示されていない場合、3つ以上示されていても、その値が極端に低い場合もある。それで、これらの形容詞対の中からある概念の測定に利用しようとする際には、因子負荷量が3つ以上示され、しかも、比較的安定した負荷量をもっている尺度を選んで尺度の構成をすることが望ましい。そして、それらの尺度群に因子分析を施

TABLE 3 主要な刺激概念における形容詞対の因子負荷量の範囲

形容詞対	使用頻度	＜自己概念＞	＜子ども観＞	＜パーソナリティ観＞	＜絵画＞	＜言語＞	＜色彩＞	＜自己イメージ＞	＜印象形成＞
(1)明るい - 暗い	63	.531 ~ .940	.600 ~ .745	.510 ~ .760	.232 ~ .923	.394 ~ .720	.910, .930	.340 ~ .852	.920
(2)やわらかい - かたい	48	.422 ~ .725	.434 ~ .638	.341, .609	.292 ~ .930	.560 ~ .635	.566 ~ .994		
(3)暖かい - 冷たい	44	.504 ~ .790	.600 ~ .774	.510 ~ .750	.631 ~ .730	.431	.519, .630	.600 ~ .720	
(4)積極的な - 消極的な	43	.574 ~ .800	.478 ~ .784	.625 ~ .819	.794	.619, .630		.590 ~ .800	.760 ~ .930
(5)強い - 弱い	43	.481 ~ .790	.579, .638	.351	.490 ~ .850	.287 ~ .680	.645 ~ .960	.370 ~ .892	
(6)活発な - うるさい	38	.360 ~ .841	.379 ~ .783	.584 ~ .770	.362 ~ .590	.289 ~ .940	.596 ~ .960	.590	
(7)陽気な - 陰気な	38	.411 ~ .831	.567 ~ .690	.588, .820	.621 ~ .977	.393 ~ .669	.810, .910	.909	
(8)美しい - 醜い	35	.545 ~ .750		.510, .730	.538 ~ .760	.498 ~ .780	.802, .920	.791 ~ .963	
(9)重い - 軽い	34	.562 ~ .720			.427 ~ .846	.445 ~ .670	.950, .961	.754	
(10)活発な - 不活発な	32	.539 ~ .700	.549 ~ .771	.613 ~ .810	.650, .780	.409 ~ .667		.410 ~ .787	
(11)好きな - 嫌いな	32	.498, .517	.356, .712	.511 ~ .837	.708, .970	.411 ~ .700	.672, .980		
(12)良い - 悪い	32	.434 ~ .830	.704	.827	.516 ~ .757	.410 ~ .930	.870, .880		
(13)親切な - 不親切な	30	.459 ~ .669	.449 ~ .666	.474 ~ .830		.702		.460 ~ .590	.720 ~ .890
(14)はげしい - おだやかな	29	.323 ~ .948	.518 ~ .761		.611, .825	.466 ~ .570	.689		
(15)楽しい - 苦しい	29	.458 ~ .830	.619		.730 ~ .968	.620 ~ .707			
(16)派手な - 地味な	28	.420 ~ .644		.610, .614	.530 ~ .776		.560 ~ .940	.230 ~ .710	
(17)面白い - つまらない	26	.569 ~ .786		.790	.320 ~ .884			.914	
(18)鋭い - 鈍い	21	.590 ~ .690	.720	.482	.340, .460	.400 ~ .562	.808, .930		
(19)気持ちのよい - 気持ちのわるい	21	.512 ~ .710	.583	.817		.485 ~ .940	.539		
(20)頼もしい - 頼りない	21	.412 ~ .686	.502 ~ .580	.450 ~ .680				.670 ~ .710	
(21)たくましい - 弱々しい	21	.379 ~ .837	.460 ~ .795	.790	.615 ~ .716			.480 ~ .770	
(22)大きい - 小さい	21	.420 ~ .630				.512 ~ .574		.876	
(23)まじめな - ふまじめな	20	.400 ~ .615	.710 ~ .711	.550 ~ .800				.500 ~ .630	.830
(24)速い - 遅い	20	.401 ~ .692	.628 ~ .676		.480, .560	.410 ~ .850	.970	.564	
(25)愉快的な - 不愉快的な	19	.478 ~ .832	.522 ~ .701	.773		.420 ~ .648			
(26)安定した - 不安定な	18	.167 ~ .730	.643	.780, .783	.890 ~ .976		.830 ~ .912		
(27)おしゃべりな - 無口な	18	.479 ~ .790	.551 ~ .701	.530 ~ .810				.040 ~ .660	
(28)きれいな - きたない	18	.640 ~ .681	.542, .647			.465 ~ .820	.930		
(29)きちんとした - だらしない	17	.400 ~ .765	.530 ~ .622	.440 ~ .730					
(30)男性的な - 女性的な	17	.194 ~ .809			.480 ~ .840	.489	.935		
(31)複雑な - 単純な	17	.548		.502	.680 ~ .703	.400 ~ .680			
(32)動的な - 静的な	17			.744	.540 ~ .847		.870, .900		
(33)素直な - 強情な	16	.413 ~ .843	.530 ~ .640	.590 ~ .749	.944			.500 ~ .570	.700
(34)責任感のある - 無責任な	16	.471 ~ .651	.500, .677	.690 ~ .767					.350 ~ .780
(35)嬉しい - 悲しい	16	.467 ~ .810			.710 ~ .770	.352 ~ .710			
(36)深い - 浅い	16	.650 ~ .770				.251 ~ .860		.756	
(37)落ち着いた - 落ち着きのない	15	.343 ~ .870	.580, .736	.575, .760					.850
(38)慎重な - 軽率な	15	.488 ~ .580		.536 ~ .760					.200 ~ .800
(39)理性的な - 感情的な	14	.300, .553	.311, .625	.470 ~ .670	.734 ~ .910		.611	.460 ~ .550	
(40)やさしい - こわい	14	.566, .642	.440, .645			.430, .720			
(41)意欲的な - 無気力な	14	.743, .740	.602	.460 ~ .691					.660 ~ .760
(42)かわいらしい - にくらしい	14	.565 ~ .733	.628	.410 ~ .740					.490 ~ .800
(43)のんびりした - こせこせした	14	.370	.514 ~ .660	.617					
(44)勇敢な - 臆病な	14	.471 ~ .794	.680, .813	.734, .830					
(45)優しい - 厳しい	14	.478 ~ .720	.600	.440 ~ .840	.350 ~ .721				
(46)丸い - 四角い	13	.700, .750	.723	.348, .770	.370 ~ .560	.379, .494	.961		
(47)広い - 狭い	13	.620	.613			.428 ~ .600			
(48)はっきりした - ぼんやりした	13		.610		.440 ~ .543	.250, .570	.880		
(49)強気な - 弱気な	12	.434 ~ .884	.570 ~ .743	.621, .720					
(50)思いやりのある - わがままな	12	.516, .662	.560, .640	.630 ~ .740				.470 ~ .610	
(51)外向的な - 内向的な	12	.490 ~ .770	.488 ~ .816	.600 ~ .870				.440 ~ .660	
(52)清潔な - 不潔な	12	.370 ~ .760	.550, .570	.570, .760					
(53)社交的な - 非社交的な	12	.670		.715 ~ .820				.560, .610	.540 ~ .800
(54)新しい - 古い	12		.440				.920		
(55)まとまった - バラバラな	12		.701		.320 ~ .870		.580, .893		
(56)元気な - 疲れた	11	.450 ~ .496	.821	.610 ~ .740					
(57)幸福な - 不幸な	11	.381 ~ .795	.437	.670					
(58)感じのよい - 感じのわるい	11			.469 ~ .640			.990		.280 ~ .930
(59)親しみやすい - 親しみにくい	11			.450					.720 ~ .970
(60)あつい - つめたい	11		.705			.279 ~ .800			
(61)優れている - 劣っている	11		.693			.687, .700		.585	
(62)敏感な - 鈍感な	10	.412 ~ .620	.470, .581	.468 ~ .680					
(63)すばやい - のろい	10	.387 ~ .635	.590, .768			.490 ~ .703			
(64)豊かな - 貧しい	10	.540	.353 ~ .680						
(65)生き生きした - 生気のない	10		.560 ~ .580		.700, .854				
(66)自由な - 不自由な	10			.690	.514 ~ .906				
(67)充実した - 空虚な	10			.784	.562, .630		.920		
(68)にぎやかな - さびしい	10			.685		.423 ~ .890			
因子負荷量の示されている尺度数		56	51	49	33	33	26	25	13

し、それらの形容詞対の因子名を明らかにすることが必要である。

第2に、各形容詞対の因子負荷量のレンジは、それぞれの刺激概念でかなり異なっている。①の群の概念では、その負荷量は極端に高い値あるいは低い値もなく、そのレンジも大きくない。ところが、②の〈絵画〉や〈言語〉では、その値は極端に高い値や低い値があり、そのレンジも大きくなっている。たとえば、“明るい—暗い”では、〈自己概念〉(.531~.940)、〈子ども観〉(.600~.745)、〈パーソナリティ認知〉(.510~.760)というように、その値は安定している。ところが同じ形容詞対で、〈絵画〉(.232~.923)、〈言語〉(.394~.720)、〈自己イメージ〉(.340~.852)というように、その値のレンジがかなりある。それで、①に示すような概念を測定しようとする場合には、“明るい—暗い”は、その測定尺度として有効であるが、②に示すような概念を測定しようとする場合には、この尺度の使用には十分気を付けることが必要である。

4. 同じ形容詞対への異なった因子命名

各々の尺度が示す因子は、これらの形容詞対をSDスケールに用いた研究者ごとに命名されている。それで、同じ形容詞対でも同じ意味内容の因子名が付けられている場合と、異なった命名がなされている場合とがある。これは、それぞれの研究者がそれぞれの条件のもとに実験や調査をおこなって結果を出しその範疇の中で因子を命名しているので、ある意味では当然のことであるかも知れない。たとえば、“明るい—暗い”の場合、〈自己概念〉で、長島他(1966)は「意欲性・強靭性」の因子に入れ、同(1967)は「向性」の因子に入れている。また、田中(1971)は「情緒性」、鈴木(1974)は「明朗性」、大石(1974)は「気分性」の因子に入れている。また同じ尺度の〈子ども観〉の場合には、小嶋(1966)と中原(1969)は「活動性」、中原(1971)は「感覚的快さ」、同(1972)は「暖かさ」に入れている。また〈パーソナリティ認知〉の場合でも、市河(1974)は「快活性」、大橋他(1978)は「活動性」、加藤他(1981)は「明朗性」の因子に入れている。

同じ“明るい—暗い”でも、〈絵画〉、〈言語〉、〈色彩〉といった概念の場合は、ひとの人格に関する概念の場合と若干異なった命名がなされている。〈絵画〉の場合、市原(1970)は「軽やかさ・楽しさ」、磯貝他(1971)は「力量性」、村上(1973)は「生命力」の因子に入れている。〈言語〉の場合でも、柏木(1963)は「感覚的快さ」、辻岡他(1975)は「感覚的快楽」、大城(1974)と須田(1975)は「評価性」の因子に入れている。〈色彩〉

では、Oyama 他(1962)は「力量性」、神作(1963)は「明るさ」の因子に入れた。

Osgood のもとの研究では、この“明るい—暗い”は、evaluation の因子に入るものである。しかしながら、ここで明らかになったように、この尺度の属している因子は、各研究者によって、またそこで測定の対象とされた概念によってかなり異なった命名がされていた。つまり、この“明るい—暗い”の尺度がどのような因子あるいは次元に入るのかについては、それぞれの研究者がそれぞれの研究の立場とその目的によって決定していると言える。したがって、いかなる形容詞対であっても、それが概念のイメージ測定に使用され、因子分析が施されてはじめて、それが属する因子が命名されるということになる。

5. SD尺度を構成する際の留意点

イメージ測定の用具として形容詞対を構成する場合には、今日までの研究の中で頻繁に使用されてきた有効な尺度を選ぶことが必要である。ところが、TABLE 3 に載せているすべての形容詞対が利用できるわけではない。〈自己概念〉、〈子ども観〉、〈パーソナリティ認知〉のようなひとの人格を対象とする概念では、TABLE 3 のほとんどの尺度が利用できるであろう。表に示している因子負荷量の結果を基にし、3つの概念のイメージ測定に有効であると考えられる尺度を構造化して示したのが、FIG. 1 である。3つの概念測定に共通して利用できる尺度は、37組ある。

〈絵画〉、〈言語〉、〈色彩〉などの概念では、(1)から(9)までの尺度を用いて構成するのが有効であろう。ところが、これらの尺度はひとの人格の測定にも有効である。それで、これらの概念を評定させる場合、特に注意を払う必要がある。というのは、これらの概念を評定する際、評定者はその対象から直接的に受けるイメージでチェックする場合と、評定者自身が本来もっている性格や態度が投影し、その評定行動に何らかの影響を与えることがあるからである。たとえば、ある〈絵画〉を見て、“陽気な—陰気な”の評定をする場合に、評定者が本来もっている陽気な性格が、その絵画の評定に反映され、その絵画を“陽気に”評定することが起こりうるであろう。また、その絵画が“陽気なものであってほしい”といった願望をもって、評定することもあり得る。

このようにして尺度を構成しても、それぞれ個々の形容詞対それ自体には、もともと固有な因子あるいは次元はないということにも留意する必要がある。確かに、TABLE 3 に示された尺度それぞれに固有な因子名が付

＜自己概念＞の測定に有効な尺度(56組)		＜パーソナリティ認知＞の測定に有効な尺度(49組)			
(1)明るい	—暗い	(8)美しい	—醜い	(32)動的な	—静的な
(2)やわらかい	—かたい	(16)派手な	—地味な	(58)感じのよい	—感じのわるい
(3)暖かい	—冷たい	(17)面白い	—つまらない	(59)親しみやすい	—親しみにくい
(4)積極的な	—消極的な	(31)複雑な	—単純な	(66)自由な	—不自由な
(5)強い	—弱い	(38)慎重な	—軽率な	(67)充実した	—空虚な
(6)静かな	—うるさい	(53)社交的な	—非社交的な	(68)にぎやかな	—さびしい
(7)陽気な	—陰気な				
(10)活発な	—不活発な				
(11)好きな	—嫌いな				
(12)良い	—悪い				
(13)親切な	—不親切な				
(18)鋭い	—鈍い				
(19)気持ちのよい	—気持ちのわるい				
(20)頼もしい	—頼りない				
(21)たくましい	—弱々しい				
(23)まじめな	—ふまじめな	(9)重い	—軽い		
(25)愉快的な	—不愉快的な	(22)大きい	—小さい		
(26)安定した	—不安定な	(30)男性的な	—女性的な		
(27)おしゃべりな	—無口な	(35)嬉しい	—悲しい		
(29)きちんとした	—だらしない	(36)深い	—浅い		
(33)素直な	—強情な				
(34)責任感のある	—無責任な				
(37)落ち着いた	—落ち着きのない				
(39)理性的な	—感情的な				
(41)意欲的な	—無気力な				
(42)かわいらしい	—にこらしい				
(43)のんびりした	—こせこせした				
(44)勇敢な	—臆病な				
(45)優しい	—厳しい				
(46)丸い	—四角い	(14)はげしい	—おだやかな		
(49)強気な	—弱気な	(15)楽しい	—苦しい		
(50)思いやりのある	—わがままな	(24)速い	—遅い	(48)はっきりした	—ぼんやりした
(51)外向的な	—内向的な	(28)きれいな	—きたない	(54)新しい	—古い
(52)清潔な	—不潔な	(40)やさしい	—こわい	(55)まとまった	—バラバラな
(56)元気な	—疲れた	(47)広い	—狭い	(60)あつい	—つめたい
(57)幸福な	—不幸な	(63)すばやい	—のろい	(61)優れている	—劣っている
(62)敏感な	—鈍感な	(64)豊かな	—貧しい	(65)生き生きした	—生気のない

＜子ども観＞の測定に有効な尺度(51組)	
(1)明るい	—暗い
(2)やわらかい	—かたい
(3)暖かい	—冷たい
(4)積極的な	—消極的な
(5)強い	—弱い
(6)静かな	—うるさい
(7)陽気な	—陰気な
(10)活発な	—不活発な
(11)好きな	—嫌いな
(12)良い	—悪い
(13)親切な	—不親切な
(18)鋭い	—鈍い
(19)気持ちのよい	—気持ちのわるい
(20)頼もしい	—頼りない
(21)たくましい	—弱々しい
(23)まじめな	—ふまじめな
(25)愉快的な	—不愉快的な
(26)安定した	—不安定な
(27)おしゃべりな	—無口な
(29)きちんとした	—だらしない
(33)素直な	—強情な
(34)責任感のある	—無責任な
(37)落ち着いた	—落ち着きのない
(39)理性的な	—感情的な
(41)意欲的な	—無気力な
(42)かわいらしい	—にこらしい
(43)のんびりした	—こせこせした
(44)勇敢な	—臆病な
(45)優しい	—厳しい
(46)丸い	—四角い
(49)強気な	—弱気な
(50)思いやりのある	—わがままな
(51)外向的な	—内向的な
(52)清潔な	—不潔な
(56)元気な	—疲れた
(57)幸福な	—不幸な
(62)敏感な	—鈍感な

＜子ども観＞の測定に有効な尺度(51組)

FIG. 1 よく用いられる＜概念＞のイメージ測定に有効な尺度

与されているかのように考えられるが、“明るい—暗い”をみても、各研究者によって、しかも、各研究分野によっても、それぞれ様々な因子名が付けられていた。つまり、これらの形容詞対それぞれが、それ独自の固有な因子名をもっているのではなく、ある研究の中で測定尺度として使用されてはじめて、その因子が決められる。各尺度の因子的意味はそれが使われた研究の中でのみ共通の意味次元を有するのであって、それ自体その研究から離れて意味をもつものではない。したがって、今後、ここに示された尺度群を利用して研究する場合には、それらから得られたデータを再度因子分析して、その尺度のもつ因子的な妥当性を確かめることが重要である。

引用文献

- 市原洋右 1970 絵画鑑賞の心理学的分析(Ⅲ)—異なる被験者についての絵画の情意的意味構造— 東京都立大学人文学報 77, 115-127.
- 市河淳章 1974 児童のパーソナリティ認知構造に関する

- 研究(1)—因子分析による検討— 広島大学教育学部紀要, 第1部 23, 289-297.
- 磯貝芳郎・千々岩英彰 1971 絵画の評価と鑑賞に関する心理学的研究 武蔵野美術大学紀要, 7, 34-58.
- 神作順子 1963 色彩感情の分析的研究—2色配合の場合— 心理学研究, 34, 1-12.
- 柏木繁男 1963 SD法による意味構造の因子論的研究 心理学研究, 35, 27-31.
- 加藤隆勝・堀啓造・高木秀明 1981 青少年の対人イメージの因子的特質 筑波大学心理学研究, 4, 77-91.
- 小嶋秀夫 1966 セマンティック・ディファレンシャルによる親の態度・行動の情緒的意味の記述の次元 金沢大学教育学部紀要, 15, 59-75.
- 村上宣寛 1973 セマンティック・ディファレンシャル法についての一実験的研究 心理学研究, 44, 179-185.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1966 自我と適応の関係についての研究(1)—Self-

- Differential の作製の試み— 東京教育大学教育学部紀要, 12, 85-106.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道
1967 自我と適性の関係についての研究 (2)—Self-Differential の作製— 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.
- 中原弘之 1969 幼児の集団内行動をとらえるための SD 尺度の作製 日本教育心理学会第11回総会発表論文集, 334-335.
- 中原弘之 1971 母親の幼児に対する態度評定尺度の作成 日本教育心理学会第13回総会発表論文集, 432-433.
- 中原弘之 1972 親子関係の実験的把握の試み(3) 日本心理学会第39会大会発表論文集, 81-82.
- 大橋正夫・平林進・小川浩・鹿内啓子・林文俊・吉田俊和・津村俊充 1978 女子大学生における対人認知と対人関係に関する追跡的研究 名古屋大学教育学部紀要, 25, 教育心理学科, 57-77.
- 大石勝代 1974 大学生, 中学生および精神分裂病者における意味構造の比較 心理学研究, 45, 21-32.
- 大城宣武 1974 沖縄における高校生の情緒的意味に関する基礎的研究 I 計量国語学, 69, 21-32.
- Osgood, C. E. 1952 The nature and measurement of meaning. *Psychol. Bull.* 49, 197-237.
- Osgood, C. E., Suci, G. J. & Tannenbaum, P. H. 1957 The Measurement of Meaning. Univ. of Illinois Press. Urbana.
- Oyama, T. Tanaka, Y. Chiba, Y. 1962 Affective dimensions of colors: A cross-cultural study. *Jap. Psychol. Research*, 4, 78-91.
- 須田洋行 1975 感覚の言語形成における役割(1) 京都大学教育学部紀要, 21, 146-153.
- 鈴木真理子 1974 児童用 Self-Differential Scale の作製 教育心理学研究, 22, 35-39.
- 田中裕次 1971 児童用 Personality Differential Scale の作製 日本教育心理学第13回総会発表論文集, 84-85.
- 辻岡美延・長岡治明 1975 Semantic Differential 法における印象次元—相良・鮑戸氏らの研究との比較について— 関西大学社会学部紀要, 第7巻第1号, 187-202.

(1985年4月30日受稿)